

賤民宣言

——或いは、台湾悲劇の道徳的な意義——

呉 毅 人

世界史においては、国家を形成した民族しか問題とならない。

——ヘーゲル『歴史哲学講義』

歴史とは、私がおこから目を覚ましたいと欲する悪夢である。(ステューヴン・ディダラス)

——ジェイムズ・ジョイス『ユリシーズ』

I

帝国主義の時代、列強の狭間に喘いだ弱小民族の活路は民族の自決であった。二〇世紀の二回にわたる大戦によって巻き起こった民族自決の波は、今日の主権的国民国家体制を形成せしめた。だが、これは矛盾をはらみ、偽善的にして保守的な体制であった。それは、帝国が強制的に引いた境界線の

内で民族の独立を宣言したものである。そして、普遍的な原則を掲げつつも、選択的な実践のみに従事した。それは、帝国の瓦解に際して生まれながら、現存する国家の境界を護ろうとする。したがって、第二次大戦後の主権的国民国家体制は、ナショナルイズム(nationalism)の原則によって実現したのではなく、国家主義(statism)の理念の拡散によるものである。いわゆる国際連合(The United Nations)は、全人類の恒久的な平和を護る自発的な諸民族の連合ではなく、むしろ国家を形成する権力を独占し、現実における勢力のバランスを維持するための主権国家のカルテル(cartel of sovereign states)である。

現代の主権的国民国家体制は、その内部において権力の分配が極めて不均衡になっている。だが、すべての国家は形式上の平等を享有している。そのため、小国は予め設定された

ルールの下、外交上の駆け引きで国家間の連携を進めることによって、大国、もしくは強権からの圧力を緩和、または回避しようとしている。これは、それ以前に起きた反植民のナショナルイズム運動の名残といえる。それは、民族解放の目的を果たしきれなかったものの、一部の弱小民族に独立した主権国家の政治形式を与えることになった。ここから、これら

だに叛乱を起こし、理性はなおも完成していない。しかし、帝国の指導者は歴史の終焉を宣言する。——これこそが現代台湾の悲劇の世界的根源をなすものである。

II

弱小民族は、主権国家というバリアーを運用し、民族解放の闘争を継続させることができるようになった。これに対して、反植民のナショナルイズムのうねりの中で自らの国家を築けなかった弱小民族は、そのほとんどが現代の主権的国民国家体制の外に排除された。出口は永久に見つからない。新たな帝国が国民国家の形式を借りて甦るとき、そして「民族統一」または「民族解放」という名のもとで「歴史的領土」もしくは「無主の地」を虎視眈々と狙っている今日、彼ら弱小民族は、窮境の中でもがき、ただ斃れるのを待ち、もしくは盲目的にある種の歴史的偶然の発生、例えば帝国の忽然たる崩壊を待つことしかできない。

まるで一九世紀から二〇世紀に移ろうとしていた頃のヨーロッパのように、現代の東アジアもまたナショナルイズムの衝突と、国民国家の対峙を孕んでいる。三つに重なった構造的要因は、現代の東アジアにおけるナショナルイズムの局面を決定した。即ち、地域的な民族解放事業の未完成、多極体制の地政学的構造が徐々にバランスを失っていること、それから資本のグローバル化が不均衡に走っていることである。

III

帝国の狭間にあって、弱小者は反抗を試みた。国家をなしている者は互いの連携に活路を見出そうとした。国家のない者、または国家が存在しても主権的国民国家体制として承認されない者は、孤立無援となり、屈辱を嘗め尽くすことになった。その結果、帝国の狭間では、異なる形態の弱小ナショナルイズムが却って発展し、隆々と成長していった。奴隷は未

まず、東アジアにおける国民国家形成の歴史的運動は未だ完了していない。近代東アジアの国民国家体制は、帝国主義とナショナルイズムが長期にわたり戦いを交えたことの産物である。それは一九世紀中葉から二〇世紀後半に至る一世紀半の間のことだ。西洋の帝国主義の脅威が国に迫り、日本は公定ナショナルイズム(official nationalism)の形式で一八七〇年代には率先して国民国家への転換を成し遂げた。そして、隣接する地域に対して帝国主義的拡張を行い、すでに屋台骨の傾いた中華帝国に取って代わろうとした。一九四五年の敗戦によって帝国は解体された。そして、一九四五年から五二年に

かけて連合国の占領地区になった。アメリカ合衆国の主導によってなされた占領統治の下、日本は強制的に平和憲法を与えられ、軍備及び交戦権を奪われた。さらに、サンフランシスコ平和条約体制に組み入れられ、アメリカの実質的な属国となった。中国は一八九五年の日清戦争に敗戦して、初めて帝国から国民国家への転換の道を歩みはじめた。だが、半世紀にもわたって、反帝国主義のポピュラー・ナシヨナリズム及び戦争による動員を経なければならず、一九四九年になってようやく中国本土で統一的な国民国家を構築した。しかるに、中国は冷戦期、常にアメリカによってアジア大陸の東北部に押しこめられ、世界制覇という壮志を実現させることは叶わなかった。そして、台湾合併の目標も達成することができなかつた。

韓国において、封建王国から国民国家への転化の胎動は、一九世紀の末に出現した。だが、近代韓国の国民意識は、日本の植民統治期に生じた反日的ナシヨナリズムによる動員の過程で成熟したものである。但し、統一された国民意識から統一された国民国家は築かれていない。一九四五年の日本敗戦の後、朝鮮半島はアメリカと当時のソビエトによって占領され、一九四八年になって、アメリカとソビエトの主導の下、南北が別々に建国した。台湾では、日本の植民統治期である一九二〇年代に、最初の台湾ナシヨナリズムが励起された。だが、一九四五年、台湾という領土が強制的に移転され、一

九四九年に中国国民党がこの島に流れ着いて中華民国政権が打ちたてられると、台湾ナシヨナリズムのさらなる発展は制限された。皮肉なことに、半世紀を経た宗主国のない植民統治と、八〇年代以来の民主化によって、この流亡の中華民国は、徐々に本土化し、「中華民国は台湾にあり」という折衷した形式の領土国家を形成するようになった。

ナシヨナリズムの観点から言えば、東アジア地域における国家の形成は、過去一世紀半は挫折した未完成の状態にあった。中国ナシヨナリズムは傷ついた尊厳を修復し、帝国時代の栄光を回復しようと強く望んでいる。そして、民族解放の最後の大事業——台湾の「祖国復帰」を遂行しようとしている。日本はナシヨナリズムゆえの渴望で、アメリカの属国という地位を振り捨て、侵略者の汚名をそそぎ、自主的な国防の力と、その経済的実力に相応する政治的地位とをそなえた「正常な国家」になろうとしている。韓国はナシヨナリズムゆえの渴望で、南北統一の悲願を達成して地域的強権の道を目指している。台湾は、日増しに成熟する国民国家の意識に駆られ、主権的国民国家体制に受け入れられる「正常な国家」となるべく努力している。一九世紀末のヨーロッパに見られた統合的なナシヨナリズム(integral nationalism)の時代のように、二一世紀初頭の東アジアのナシヨナリストたちは、依然として熱血をたぎらせている。というのも、挫折した夢は完成させねばならず、抑圧を受けた熱情は、これを導いて

吐き出さなければならぬからだ。これら挫折した熱情は一つの共通のテーマ——国家の正常化を指し示す。だが、それぞれの国の国家正常化の目標の間には、潜在的な、あるいは顕在的な、そして直接的もしくは間接的な矛盾と衝突が満ちている。東アジアのナシヨナリストたちは互いに猜疑し、牽制しあっている。我々は、依然として歴史の正午を歩いている。慄きながら暴力の発生を待っている。

IV

次いで、東アジアの地政学的構造が、徐々に帝国の衝突を誘発させようとしている。中国の経済力と軍事力は日増しに強大になり、東アジアの地政学的構造を、一九九〇年代のフランスの取れた多極体制から不安定でアンバランスな多極体制へと転化させようとしている。言い換えれば、日増しに大きくなっている中国の勢力は、地域の覇権者としての地位を追い求めているといえる。こうした潜在的な地域覇権の出現を受けて、新たな外交上の駆け引きによる連携の波がすでに起きている。中国が極東の覇権者になるのを防ぐべく、アメリカと日本は軍事同盟を徐々に強化し、台湾を組み込もうとしている。中国勢力の台頭から逃れるために、台湾は米日の同盟に加わるか、もしくはその属国にならんとしている。アメリカの東アジアに対する、そして朝鮮半島に対する干渉に抵抗するために、韓国は新興の中国との連携を画策している。アメリカの政治学者であるジョン・ミアシャイマー(John

V

Measheimer)の「攻撃的現実主義(offensive realism)」の主張によれば、国際政治におけるアナキー的構造は、攻撃を意図しない強国が攻撃を防御とする選択をせざるを得ないようになされる。現代の東アジアにおける不安定な多極体制は、先制攻撃の準備を進行させるようアメリカと中国の両強国を徐々に誘導している。そして、まさに発生せんとしているこの構造的な衝突に周辺国を徐々に巻き込んでいる。

第三に、グローバル化した資本の不均衡な拡張によって、世界規模の資源、富、権力の不平等な分配が起こり、周縁に位置する新興国家の発展の窮境を招いている。これが周縁を刺激して中心部に対する反発を喚起している。周縁の中心部に対する反発の主要な形態は、即ちナシヨナリズムである。周縁のポストコロニアル・ナシヨナリズムは、その表現において二つのレベルに分けることができる。一方では、周縁地域の政治的エリートたちは、公定ナシヨナリズムと国民国家という制度を運用して外来の資本を制約することによって、自国における資本の蓄積と社会統合を行わなければならない。他方では、周縁地域の人々もまた、常にナシヨナリズムとローカルな文化的シンボルを動員して、下から上へと、国に対して政治への参加、経済の再分配、そして社会の正義を要求している。たとえエリートたちによる操縦やポピュリズムのリスクに直面しようとも、ナシヨナリズムは、依然としてポ

ストコロニアルな周縁地域において最も合法的で、最も民衆的基礎を有するイデオロギーである。韓国、シンガポール、及びこの二〇年来の中国、そしてタイ王国などに代表される東アジアの発展型の国家は、即ちポストコロニアル・ナショナリズムの特殊な類型の一種である。日増しに拡張し、深く浸透する資本のグローバル化に直面してもなお、発展型のポストコロニアル・ナショナリズムは決して畏縮しない。その典型的な戦略は、グローバル化の言説を「転用」して、国家経済を進展させるためのツールとすることにある。

VI

現代の東アジアは、ナショナリズム、国民国家及び帝国の時代である。長期にわたり抑圧を受けた地域的なナショナリズムのエネルギーは発散の時を待つ。新帝国の拡張は旧帝国の干渉を招き、資本のグローバル化、その傲慢な侵入は、現地のオフィシャルな、そしてポピュラーなナショナリズムを助起した。東アジアにおけるナショナリズムの現局面においても、国際政治のルールは、依然として勢力均衡という古典的な現実主義を原則としている。帝国の強権は互いに猜疑したり、連携したりしている。しかも、弱小者に、覇業のための駒になるよう強要している。小国の選択肢は、異なる帝国強権に対して遠交近攻策を採るか、外交の駆け引きで連携するか、もしくは脅迫、合併、支配を受け入れるかのいずれかである。東アジアのナショナリズムの現局面において、小国に

は帝国強権の掌握から逃れるという選択肢はない。

こうした国際政治、経済と歴史の発展の構造的な論理は、個人の主観的な意志によって転換することはなく、ましてや観念論者の理論構築によって変化することもない。竹内好が「中国」と「アジア」を理想化した目的は、日本ナショナリズム——いわゆる「正常」もしくは「健全なる」日本ナショナリズムの再構築にあった。現代東アジア各国の新アジア主義、もしくは「東アジア」にかかわる言説は、各国ナショナリズムのイデオロギー的基礎を再構築することを目的とし、かつある種の相対的に進歩する地域主義、もしくは国民国家連盟形成への道をつけることができると思案される——例えば、歴史の恨みを捨てた中、日、韓を中心とした「東亜共同体」。それが竹内好であろうと、一部が竹内好から来た現代の新アジア主義であろうと、いずれも進歩的ナショナリズムの変形である。これら戦後のアジア主義は、手はずけるものであり、ナショナリズムを捨てようと言言するものではない。彼らは、主権的国民国家体制の国家形成権に対する独占に挑戦したことはなく、また権力のバランスが取れた現実主義の原則を超えることもできない。これこそが、戦後のアジア主義にかかわる様々な主張の中に台湾の位置を見つけることができなかつた理由である。というのも、台湾は、これら進歩的なゲームに参加する資格すら取得していないからだ——その資格とは、即ち主権国家の身分(sovereign statehood)だ。

だが、中国が台湾を領有せんとする復国主義(irredentism)の主張を放棄しないかぎり、台湾が主権国家の資格を得ることは不可能である。即ち、いかなる形式の東亜共同体であろうと、それに参加する機会はない。包容力があるはずのアジア主義の理想も、結局のところ強権政治に融通をきかせる現実によって、別の形の弱者の排除となり、そしておそらくは、未来の帝国拡張を合理化するイデオロギーになるであろう。この点について言えば、現代のアジア主義は、八〇年前の孫文の大アジア主義にさえ及ばない。というのも、孫文の主張する「瀋弱扶傾(弱きを救い、傾きを助く)」は、同時に帝国主義強権政治、及び主権国家の原則に対する挑戦であったからだ。ともかく主知主義(intellectualism)は、複雑に絡み合った歴史的政治問題をいかにしても解決することはできない。政治問題は、結局のところ政治の領域に立ち返って答えを見つければならない。すでに三〇年も前に、在米の中国思想史学者である林毓生氏は、かくも鋭く穿った所見を提起していた。

VII

歴史に取り残された政治問題には、主知主義による答えは見当たらない。東アジアのナショナリズムの現局面において、まさに新たな帝国が生まれようとしているが、旧帝国はもとより去っていないし、小国はといえば、或るものは帝国の狭間で機会主義を採って外交上の駆け引きによる連携を策し、も

う一つの大国にならんと待っている。或るものは、根本的に活路すら見出せず、孤城に閉じ込められたままである。たとえ帝国強権が覇を争おうと、弱小国家が生きる道を求めようと、いずれも日一日と互いのナショナリズムを強化している。これこそが、東アジアの近代史に残された政治の難題である。それは、多重的な要素が集合して形成された構造的な難局であるため、主知主義による解決案はない。さもなくば、今を遡ること二一五年前にカントが『永遠平和のために』(一七九五年)の中で、我々のために率先して回答していたはずだ。

VIII

帝国の狭間で喘ぐ弱小者は、帝国から逃れる選択肢を持っていない。主権国家の形式を掌握した小国は、「蛇蝎のように狡猾に、鳩のようにおとなしく」帝国強権の間を行き来する。遠交近攻策を採るか、時には帝国の先陣を務め、番犬の役割を演じ、帝国に拘束された更なる弱小者が道を切り開いて逃げ出すのを防ぐ。それら主権国家の形式を持たない者、もしくは持っているも主権国家体制に承認されない更なる弱小者は、甚だしくは帝国を相手に談判し、連携するだけの元手すらなく、帝国にとってはまな板の上の鯉でしかない。彼らの運命は帝国にハイジャックされ、帝国の覇業のための持ち駒に成り果てている。彼らの民族の生命史は他律的で、外部の者によって決定される。彼らのナショナリズムは、もとより帝国の覇権争いと連続した植民統治の過程で生じた偶然

の産物である。民主主義は彼らにとって他律の宿命を振り払い、自主性を追求しようとする謙遜なる渴望にほかならない。だが、現代の弱小民族のナショナリズムは、未完成で、しかも完成不可能なものである。彼らが「日々行われる国民投票」を介して構築する民主主義は不完全で、かつ完全であってはならない。

完成されたナショナリズムならば、自己の主権的国民国家を追求するはずだし、完全な民主主義ならば、自ら決定する主権をもつ人民(sov^{er}ign people)を追求するはずだが、それは地域的権力のバランスを破壊し、帝国の覇業の計画を攪乱するものと目されるだろう。現代の帝国主義者は、この種の未完成にして、完成不可能な弱小民族のナショナリズムの窮境を「現状(status quo)」と称する。ここで理解しておかなければならないのは、現代の帝国主義者は必ずしも生れついでての悪漢ではないということだ。彼らは構造的誘因の下における拡張主義者である。ビスマルクは言った。プロイセンは「それらポーランド人を倒さなければならぬ。彼らが一切の希望を失い、地に倒れて死亡するまで。私は彼らの処遇に強く同情する。だが、我々が生存しようとするのであれば、我々に別の選択肢はない。彼らを消滅させるだけだ」。そうだ。帝国の狭間に生きる弱小民族は、或る者は脅かされて覇業のための手駒となり、ある者は自身と無関係な覇権争いに勝った帝国に併呑された。これが構造的な実存悲劇である。それは善人

彌は、彼らを痛苦で苛む。痛苦は、彼らのはっきりした意識を却って保持させる。賤民は未来永劫、自身の直面する滅びの影によって、生命を渴望し、存在を渴望する。この残酷で、意味のない、荒唐無稽な、しかし、かくも美しき現世への存在を渴望する。この種の苦痛にしてはつきりと意識される生存の欲望は、無意味で残酷な現世に対して、その意義を求めらるものであり、一種の欲望の承認を要求するものである。それは賤民が「自由」を追求する形式である。

「まさに、この道が阻害を受けているからこそ、我々はこの道を引き続き前進する」(アルベール・カミュ『手帖』)。そのとおりである。我々には、他に選択肢がないのだから。たとえ世界が我々を放逐しようとして、我々はさらに執拗に世界に立ち向かっていく。これもまた我々の世界なのだから。我々の唯一の世界。

も悪漢もなく、善悪を超越し、強者と弱者が共演する「出口なし(huis clos)」の悲劇だ。

Formosissima Formosa!——世界史に出現したその一刻から、台湾は、あの美しくも徒勞にくれた困窮者、永遠の賤民を演じることを運命によって定められていたのであるか。

IX

台湾の悲劇の道德的意義は、一つには主権的国民国家体制における賤民階級の一員として、我々と他の排除された賤民の存在が、国際政治における堅牢で打ち破ることのできない現実主義の真理と、これら賤民の処遇を無視するあらゆる理想主義の高言と道德教条の偽善とを立証することにある。台湾人として、我々は構造的な懷疑主義者であらざるを得ない。我々は一切の高尚な価値を評価しなおさなければならぬ。

X

台湾の悲劇の道德的意義は、もう一つには、構造的な懷疑主義はニヒリズムに至ることはなく、逆に懷疑主義は一種の苦痛を伴う、意識のはっきりとした生存の欲望——希望ではなく、生存の欲望——に至らしめるということである。のみならず、この種の生存の欲望は、酩酊の幻覚ではなく、苦痛としてはっきりと意識されるものである。一切を超越するものではなく、現世のものである。賤民が常に受ける屈辱と蹂

XI

賤民の置かれた窮境は、道德的民族を強制的に成就させる。しかし、窮境が生んだ道德の意義が、その窮境を終わらせることはない。道德主義もまた、賤民を解放しない。帝国の強権から見れば、賤民の困窮はいかなる実践の意義も有さない——それは一種の悲劇の美学の範疇に属する。「その必然と壊滅する運命を傍観しつつ、我々が優雅に、そして軽く嘆いたことで、我々の世慣れた魂は浄化される。嗚呼、賤民の悲劇は、帝国の墮落を救った……」。

それでは、賤民自身には、どのような活路が見出されるの

M.J.サンデル著/林他訳
完全な人間を目指さなくてもよい理由
遺伝子操作とエンハンスメントの倫理 完全化の追求で人は何を失うか。 1890円

長友敬一
現代の倫理的問題
倫理・義務論・功利主義
徳を踏まえ、応用倫理の最新
テーマを解説。 2730円

馬淵浩二
倫理空間への問い
応用倫理学から世界を見る
現代世界が直面する重大な
問題群に挑む。 2835円

渡部 明
生命と情報の倫理
『新スタートレック』に人間
を学ぶ 名作SFで学ぶユ
ニークな入門書。 2520円

齋藤純一編
公共性の政治理論
自由・平等・民主制など、重
要かつ多彩な政治概念から
探る公共性の本質。 3360円

大塚啓二郎・東郷賢・浜田宏一編
模倣型経済の躍進と足踏み
戦後の日本経済を振り返る
なぜ停滞を抜け出せないの
か。総合的に考察。 3990円

本山美彦
オバマ現象を解説する
金融人脈と米中融合 人々
の熱狂の背後にあるものは
何かを徹底考察。 2625円

▶税込価格

ナカニシヤ出版
京都市左京区一乗寺木ノ本町15
http://www.nakanishiya.co.jp/

XII

悲劇の運命は、悲劇的な贖いの啓示を必要とする。例えば、アイスキュロスの『縛られたプロメテウス』である。太古の人類は、自身が必然的に滅亡するものと予知することができた。これは、彼らをして痛苦と絶望に陥れるものだった。死亡を予知する病いから救うために、プロメテウスは人類に二つの贈り物をした。盲目的な希望と火である。盲目的な希望は人類に二度と死亡を予見させない。火は技術をもたらした。技術は人類を漆黒の洞窟から脱け出させ、人に理性を持たせ、自己の主宰とさせた。だが、これは不完全な理性であり、不徹底な贖いである。アイスキュロスは、このプロメテウスの口を借りて述べた。「技術は必然性に比して、はるかに脆弱だ」——完全な理性は、陽光のように真実を明らかにする。だが、洞窟を出たばかりの人類は、星空の下でのみ何とか認識することはできたが、しかし生命の真相を見極めることはできなかった。人類を代表するイーオーは、今になって痛みがさらに増したが、痛苦の根源がどこにあるのかわからなくなったと訴えた。彼女はプロメテウスに二回目の救いを求めた。岩山に縛られたプロメテウスは予言した。二回目の、即ち真の救いは、以後の王者の一族、イーオーの子孫の一二代目の末裔によってなされるだろう、と。彼らはプロメテウスの予言を思い出し、覚醒したのち、德行、礼儀を覚え、国の秩序を理解しはじめ、そしてゼウスが頼りと

する強制と暴力の僭主政治を打ち倒して、初めてのポリスを築くだろう。

XIII

悲劇の運命から解放されるためには二重の救いと二回の技術の伝承と修得を経なければならぬ、とプロメテウスの予言は示唆してくれている。一回目は物作りの技術で、二回目はポリス作りの技術、いわゆる *statecraft* である。つとに歴史は、物作りの技術を我々に伝えた。だから我々は、かくも物作りと商いに長けている。だが、我々はさらに一歩進んでポリス作りの技術を学ばなければならない。我々は、政治の現実的な構造的窮境において、このポリス作りの技術を修得し、砥ぎ上げ、磨き上げなければならない。我々は不公正な世界に、公正なるポリスを創り出さなければならない。だが、公正なるポリスは賤民たちを率いて、帝国の囲みを突破できるのであろうか。それは誰にもわからない。だが、我々が確かにわかるのは、公正なるポリスは一本の松明にも似て、帝国の不毛さと偽善を照らし出さうということだ。我々は生まれながらの善良な市民でもなければ、高貴な王者の一族でもない。窮境に迫られて、我々は美德と技術を学んだ。困り込まれたことは、我々をして世界に立ち向かわせた。善に向かうよう迫られた——これこそが賤民の道徳の系譜学であり、奴隷の復讐の別形態である。

だから、賤民の期待する解放は、構造的な解放ではない。それは、自我を精神的に強靱にすること、及び尊厳を自ら修復することである。それに力の蓄積。予期できぬ未来の歴史のための力の蓄積。帝国が突然崩壊した時、もしくは帝国が軍勢を東に差し向けた時のために……

自由のために力を蓄える。もしくは尊厳ある死のために力を蓄える。

XIV

「風来自由心」——南明朱氏の最後の血族が、一六八三年、台湾陥落の際に書き残した絶筆である。この詩を捧げさせてもらいたい。不道德な世界によって窮地に追込まれつつも善に向かうよう迫られた、屈強で誇り高きすべての賤民に。

引用・参考文献

- Aeschylus, *Aeschylus II*, trans. by Seth G. Bendarete and David Grene, Chicago and London: The University of Chicago Press, 1956.
- Barry, Brian, "Statism and Nationalism: A Cosmopolitan Critique," in Ian Shapiro and Lea Brilmayer, eds., *Global Justice*, New York and London: New York University Press, 1999, pp. 12-66.
- Cheah, Pheng, *Inhuman Conditions: On Cosmopolitanism and Human Rights*, Cambridge, Massachusetts and London, Eng-

land: Harvard University Press, 2006.

Hegel, G. W. F., *Introduction to the Philosophy of History*, trans. by Leo Rauch, Indianapolis & Cambridge: Hackett Publishing Company, 1988.

Kant, Immanuel, *Political Writings*, edited by Hans Reiss and trans. by H. B. Nisbet, Cambridge: Cambridge University Press, 1970; 2nd, enlarged edition, 1991.

Lin, Yü-sheng, *The Crisis of Chinese Consciousness: Radical Antitraditionalism in the May Fourth Era*, Madison: The University of Wisconsin Press, 1979.

Maier, Charles S., *Among Empires: American Ascendancy and Its Predecessors*, Cambridge, Massachusetts and London, England: Harvard University Press, 2006.

Mearsheimer, John J., *The Tragedy of Great Power Politics*, New York & London: W. W. Norton & Company, 2001.

Shin, Gi-Wook, *Ethnic Nationalism in Korea: Genealogy, Politics, and Legacy*, Stanford, California: Stanford University Press, 2006.

浅羽通明『ナショナリズム——名著でたどる日本思想入門』東京：筑摩書房（ちくま新書）二〇〇四年。

小熊英二『民主と愛国——戦後日本のナショナリズムと公共性』東京：新曜社、二〇〇二年。